ぜんがめ丘

志布志市有明の山重集落にぜんがめ丘と呼ばれている小高い丘があります。

昔、ある男がこの丘の下に降りて行きました。小さな泉が見えたので、のどの渇きをいやそうと思ったのです。泉の水を手にすくって口に含み、驚きました。お酒だったのです。気のせいかもしれないと思い、何度かすくって飲んでみましたが、間違いなくお酒でした。「これはひともうけできるわい」と、男は言いながら、あたりを見回して誰もいないのを確かめ、このことは誰にも言いませんでした。

あくる朝、男は大きな樽をかついできて泉のお酒を汲み入れました。そして、それを町に運び売ったのでした。何日もこうしているとお金がたまっていくので、大きな瓶に入れました。ひとつの瓶がいっぱいになると、泉の上にある丘に運び、土の中に埋めました。

そのうち、樽をかついで行き来するのを難儀だと思うようになり、ある日、牛に樽を背負わせて泉に連れて行きました。そして、いつものようにお酒を汲もうとしました。すると、牛もトコトコ泉に近づき首をのばして飲み始めたのです。男はカッとなりました。

「こいは売りもんじゃ。お前に飲まれてたまるか」と牛を追いやりうち殺してしまいました。やがて、気を取り直した男はお酒を汲もうとしましたが、それは普通の水になっていました。何度汲んでみても同じで、その水も後には涸れて泉もなくなったそうです。

男のその後のことは、よくわかりません。しかし、そこは「ぜんがめ丘」のことであり、お金のつまった瓶が埋められたままであるということは今もなお語り継がれています。

丘への上り口近く、赤い鳥居が樹間に見え、この先に早馬どん（馬の神様）が祭られています。農耕馬の飼育が盛んであった頃のように（盛大ではないけれど）、現在でも年一度のお祭りを行っているということです。

（原話『いろり考』『有明町の文化財』）

文／有馬英子　絵／二石綱夫